

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 9 月 9 日現在

機関番号：35410

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K17268

研究課題名（和文）思春期から青年期の過敏型自己愛傾向の発達の变化と愛着スタイルとの関連

研究課題名（英文）Relationship between developmental changes in hypersensitive narcissism and attachment style in adolescence

研究代表者

神谷 真由美（Koya, Mayumi）

比治山大学・現代文化学部・講師

研究者番号：70710078

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、思春期から青年期における過敏型自己愛傾向の発達の变化と愛着スタイルとの関連の検討であった。中学生、高校生、大学生を対象とした調査により、過敏型自己愛傾向が思春期から青年期にかけて高まることが示された。また、過敏型自己愛傾向と愛着スタイルの関連を検討した結果、過敏型自己愛傾向と特に関連するのは愛着スタイルのうち「アンビヴァレント型」であり、過敏型自己愛傾向が改善した者は「アンビヴァレント型」が減少していることが明らかとなった。これより、青年の過敏型自己愛傾向を改善するためには、対人関係におけるアンビヴァレントな考え方に焦点を当てる支援が有効と示唆される。

研究成果の学術的意義や社会的意義

思春期から青年期に生じる心理的問題の根底には、自己愛の歪みや傷つきの存在が指摘されている。自己愛傾向は誇大型と過敏型の2つのタイプがあるが、日本では文化的背景から過敏型自己愛傾向が表れやすいと指摘されている。本研究では、過敏型自己愛傾向に焦点をあて、中学生・高校生・大学生を対象に過敏型自己愛傾向の発達の变化をとらえたことに意義がある。また、自己愛傾向と愛着スタイルとの関連を検討し、青年の過敏型自己愛傾向を改善するためには、対人関係におけるアンビヴァレントな考え方に焦点を当てる支援が有効という示唆を得たことに意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to examine developmental changes in hypersensitive narcissistic tendencies and the relationship between hypersensitive narcissistic tendencies and attachment styles during puberty and adolescence. A survey of junior high school, high school, and university students showed that the hypersensitive narcissistic tendency increased from puberty to adolescence. In addition, as a result of examining the relationship between the hypersensitive narcissistic tendency and the attachment style, "ambivalent type" was particularly associated with the hypersensitive narcissistic tendency. It was revealed that those who had improved irritable narcissism tended to have lower "ambivalent type" scores. This suggests that support for focusing on ambivalent thinking in interpersonal relationships is effective in improving hypersensitive narcissistic tendencies.

研究分野：臨床心理学

キーワード：青年期 自己愛 過敏型自己愛傾向 発達の变化 愛着スタイル

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 思春期・青年期の自己愛傾向に関する心理学的研究

近年、不登校や引きこもり、暴力、いじめ、自殺といった困難な問題を抱える中学生・高校生が一定数おり(文部科学省, 2019)、上述した問題を抱える大学生も増加している(例えば、苦米地, 2006)。これらの問題の根底には、自己肯定感の低さや、自己愛の歪みや傷つきがあるといわれる(川崎, 2011)。現在、自己愛研究においては、自己愛傾向を誇大型と過敏型の2類型から捉える視点が注目されている。しかし、わが国においては文化的背景から、この2類型のうち過敏型自己愛傾向が表れやすく、不適応の指標とも関連がみられている(Ronningstam, 2005; 清水・岡村, 2010)。そのため、思春期、青年期の児童生徒を過敏型自己愛傾向の視点から心理学的に理解し、心理的支援方法や予防的介入方法を考案することは、わが国の青年の精神的健康の維持において、喫緊の課題である。また、思春期から青年期を対象とした、自己愛傾向の発達的变化に関する研究では、国内外で横断研究はみられるものの、過敏型自己愛傾向に焦点をあてた研究はみられない。縦断研究に関しては、国外では大規模な縦断研究(Wink, 1992)もみられるが、これも過敏型自己愛傾向に焦点を当てていない。過敏型自己愛傾向に焦点をあてた縦断研究は、事例研究の範囲にとどまっている。以上のような研究状況から、中学生・高校生・大学生を対象に、横断的・縦断的に過敏型自己愛傾向の発達的变化を検討する。

(2) 思春期・青年期の自己愛傾向と愛着スタイルとの関連に関する心理学的研究

近年、自己愛傾向と愛着スタイルの関連が指摘されはじめている(例えば、Fonagy, 2001)。愛着スタイルとは、ストレス状況下で繰り返される、愛着対象(他者)との相互作用の質に応じて形成された情報処理や行動の特徴のことである(Bowlby, 1973; 中尾, 2012)。思春期から青年期を対象に、自己愛傾向と愛着スタイルとの関連を検討した実証研究は、国外ではいくつかみられるものの、国内では数少ない(神谷他, 2013)。そこで本研究では、発達段階における過敏型自己愛傾向と愛着スタイルとの関連について検討する。

2. 研究の目的

第1に、思春期から青年期における過敏型自己愛傾向の発達的变化を、中学生・高校生・大学生を対象とした質問紙調査により検討することである。第2に、発達段階における過敏型自己愛傾向と愛着スタイルとの関連を検討することである。以上の目的を検討することで、思春期から青年期の心理学的理解を示し、心理的支援や予防的介入方法の提案を行う。

3. 研究の方法

(1) 調査手続きと対象者

本研究は中学生・高校生・大学生を対象に、2回のアンケート調査を行った。第1回調査(Time 1)は2016年5-6月、第2回調査(Time 2)は2017年1-2月に行った。2回の調査とも回答が得られ、同一の対象者と照合できたのは、中学生295名(男性145名、女性150名)、高校生137名(男性58名、女性79名)、大学生123名(男性83名、女性40名)の計555名であった。

(2) 調査内容

第1回調査、第2回調査とも以下の内容を調査した。過敏型自己愛傾向の測定のため、自己愛的脆弱性尺度短縮版(上地・宮下, 2009; 以下NVS短縮版)を用いた。「自己顕示抑制」「自己緩和不全」「潜在的特権意識」「承認・賞賛過敏性」の4下位尺度、5段階評定、全20項目。愛着スタイルの測定のため、4分類成人愛着尺度(加藤, 1999)と愛着パターン尺度(上地他, 2015)を用いた。4分類成人愛着尺度は、教示の際に愛着対象として一般他者を想定させ、4つの愛着スタイル(安定型、拒絶型、とらわれ型、恐れ型)の記述文について、どの程度自分に当てはまるかを7件法で回答。次に4つのスタイルから自分に最も当てはまると思うスタイルを1つ選択。愛着パターン尺度は、まず愛着対象として、「父・母・きょうだい・祖父母・友達・恋人・その他」から1人を選択後、5件法、24項目に回答。「アンビヴァレント型」「安定型」「回避型」の3下位尺度。

4. 研究成果

(1) 過敏型自己愛傾向の発達的变化

過敏型自己愛傾向の平均値と標準偏差をTable 1に示した。過敏型自己愛傾向の発達的变化を検討するため、NVS短縮版の合計点について、発達段階(対象者間:中学生・高校生・大学生) × 性別(対象者間:男性・女性) × 調査時期(対象者内:Time 1・Time 2)の3要因分散分析を行った。その結果、発達段階と性別の主効果が有意であった(発達段階: $F(2, 549) = 58.39, p < .01$, 性別: $F(1, 549) = 29.68, p < .01$)。発達段階については多重比較の結果、中学生 < 高校生 < 大学生と有意に得点が高かった。性別については、男性よりも女性の得点が高かった。調査時期の主効果と交互作用には、有意差は認められなかった。これより、各発達段階の主効果は有意であり、中学生、高校生、大学生と過敏型自己愛傾向は高まることが横断的に示された。また、性別の主効果が有意であり、男性よりも女性の方が過敏型自己愛傾向は高いことが示された。一方で、調査時期の主効果に有意差は認められず、過敏型自己愛傾向が中学生から大学生にかけて高まることを縦断的には示すことができなかった。その理由として、Time 1とTime 2の間隔は約7~8か月間と短期間であったことが考えられる。今後は、より長期間にわたって調査を行う必要がある。

Table 1
各発達段階における過敏型自己愛傾向の平均値 (標準偏差)

	中学生			高校生			大学生		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
Time 1	44.22 (11.91)	49.41 (12.90)	46.82 (12.41)	48.41 (9.97)	52.30 (11.60)	50.35 (10.78)	56.07 (11.65)	62.78 (13.16)	59.42 (12.40)
Time 2	42.90 (11.85)	49.76 (11.89)	46.33 (11.87)	48.86 (10.36)	53.47 (11.16)	51.01 (10.76)	56.89 (13.19)	63.15 (13.11)	60.002 (13.15)

(2) 過敏型自己愛傾向と愛着スタイルの関連

過敏型自己愛傾向と愛着スタイルの関連を検討するため、発達段階、性別、調査時期ごとに、NVS 短縮版合計点と4分類愛着スタイル尺度、愛着パターン尺度の相関係数を算出した (Table 2)。Time 1 で、NVS 短縮版合計点と中程度の相関が認められたのは「とらわれ型」と「アンビヴァレント型」であった。「とらわれ型」は、中学生の男女、高校生の男性、大学生の男性に中程度の正の相関が認められた。「アンビヴァレント型」は、中学生の男女、高校生の女性に中程度の正の相関が認められた。Time 2 で、NVS 短縮版合計点と中程度の相関が認められたのは「安定型」と「とらわれ型」、「アンビヴァレント型」であった。「安定型」は、中学生の男性に中程度の負の相関が認められた。「とらわれ型」は、中学生の男女、高校生の女性に中程度の正の相関が認められた。「アンビヴァレント型」は、中学生の女性、高校生の男性、大学生の女性に中程度の正の相関が認められた。これより、過敏型自己愛傾向と関連がみられるのは、愛着スタイルのうち「とらわれ型」「アンビヴァレント型」「安定型」であることが示された。しかし、発達段階や性別によって関連は異なるため、より詳細な検討が必要である。

Table 2
各発達段階における過敏型自己愛傾向と愛着スタイルの相関

	中学生		高校生		大学生		
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
Time 1	4 分類成人愛着尺度						NVS 短縮版合計点 (Time 1)
	安定型	-.17*	-.27**	-.32*	-.15	-.08	-.30
	拒絶型	-.04	-.10	-.11	-.03	-.26*	-.30
	とらわれ型	.41**	.48**	.47**	.26*	.50**	.26
	恐れ型	.26**	.23**	.20	.08	-.05	-.10
	愛着パターン尺度						
	アンビヴァレント型	.52**	.62**	.27*	.52**	.31**	.17
	安定型	.02	-.17*	.02	-.06	.02	.05
	回避型	.18*	.14	.11	.20	-.06	.02
	Time 2	4 分類成人愛着尺度					
安定型		-.44**	-.28**	-.28*	-.28*	-.31**	-.29
拒絶型		-.11	-.18*	-.09	-.32**	-.06	-.08
とらわれ型		.40**	.44**	.38**	.53**	.23*	.28
恐れ型		.09	.17*	.35**	.12	.25*	.10
愛着パターン尺度							
アンビヴァレント型		.34**	.51**	.48**	.35**	.38**	.46**
安定型		-.07	-.12	.03	.01	-.12	.06
回避型		.19*	.18*	.12	.13	.13	.05

** $p < .01$, * $p < .05$

(3) 過敏型自己愛傾向の変容と愛着スタイルの関連

過敏型自己愛傾向の変容による群分け: Time 2 の NVS 短縮版合計点から Time 1 の NVS 短縮版合計点を引いた値を過敏型自己愛傾向変化量とした。 $M=0.11$, $SD=10.17$ であった。過敏型自己愛傾向変化量が $M - 0.5SD$ より小さい者を「改善群」($n=163$), $M \pm 0.5SD$ 以内の者を「変化なし群」($n=243$), $M + 0.5SD$ より大きい者を「悪化群」($n=149$) とした。性別、発達段階の内訳を Table 3 に示した。

愛着スタイル変化量の比較: 愛着パターン尺度の3下位尺度について、Time 2 の得点から Time 1 の得点を引いた値をそれぞれ「アンビヴァレント型」変化量、「安定型」変化量、「回避型」変化量とした。3群の平均値と標準偏差を Table 3 に示した。3群を独立変数、愛着スタイル変化量を従属変数とした1要因分散分析を行った。その結果、「アンビヴァレント型」変化量で有意差が認められ ($F(2, 552)=14.97, p < .01$)、「回避型」変化量で有意傾向がみられた ($F(2, 552)=2.63, p < .10$)。「安定型」変化量では有意差は認められなかった。多重比較の結果、「アンビヴァレント型」変化量は、改善群が変化なし群と悪化群より得点が低かった。「回避型」変化量では、改善群が悪化群より低い傾向がみられた。過敏型自己愛傾向が改善した者は、不安定な愛着の得点が減少しており、特にアンビヴァレント得点が減少している。これより青年期の過敏型自己愛傾向

の改善には、対人関係におけるアンビヴァレントな考え方や感情に焦点を当てていく必要があると示唆される。

Table 3
過敏型自己愛傾向変化量 3 群の内訳と愛着スタイル変化量の平均値

	性別 (n)		発達段階 (n)			愛着スタイル変化量の平均値 (SD)		
	男性	女性	中学	高校	大学	「アンビヴァレント型」変化量	「安定型」変化量	「回避型」変化量
改善群	89	74	98	32	33	-1.61 (6.23)	-0.32 (4.78)	-0.57 (5.55)
変化なし群	121	122	119	67	57	1.16 (5.82)	0.30 (5.15)	-0.19 (5.12)
悪化群	76	73	78	38	33	1.75 (5.89)	-0.46 (4.32)	0.75 (5.10)

(4) まとめ

本研究の目的は、思春期から青年期における過敏型自己愛傾向の発達の变化を検討することと、発達段階における過敏型自己愛傾向と愛着スタイルとの関連を検討することであった。中学生、高校生、大学生を横断的に比較検討することで、過敏型自己愛傾向が思春期から青年期にかけて高まることが示された。

また、過敏型自己愛傾向と愛着スタイルの関連を検討した結果、過敏型自己愛傾向と特に関連するのは愛着スタイルのうち「とらわれ型」「アンビヴァレント型」であることが分かった。加えて、過敏型自己愛傾向の変化量と愛着スタイル変化量の関連を検討したところ、過敏型自己愛傾向が改善した者は、不安定な愛着の得点が減少しており、特に「アンビヴァレント型」得点が減少していることが明らかとなった。

これらの結果から、青年の過敏型自己愛傾向を改善し、メンタルヘルスを良好な状態に維持するためには、対人関係におけるアンビヴァレントな考え方や感情に焦点を当てていく支援を行うことが有効と示唆される。

引用文献

- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss*. Vol. 2. Separation: Anxiety and anger. New York: Basic Books.
- Fonagy, P. (2001). *Attachment theory and psychoanalysis*. New York: Other Press.
- 上地 雄一郎・牧野 史奈・山下 明子・神谷 真由美 (2015). 青年・成人用愛着パターン尺度の作成の試み 心理・教育臨床の実践研究 (岡山大学大学院教育学研究科心理教育相談室紀要), 13, 13-22.
- 上地 雄一郎・宮下 一博 (2009). 対人恐怖傾向の要因としての自己愛的脆弱性, 自己不一致, 自尊感情の関連性 パーソナリティ研究, 17, 280-291.
- 加藤 和生 (1999). Bartholomew らの 4 分類成人愛着尺度 (RQ) の日本語版の作成 認知・体験過程研究, 7, 41-50.
- 川崎 直樹 (2011). 自己愛の心理学的研究の歴史 小塩真司・川崎直樹 (編) 自己愛の心理学——概念・測定・パーソナリティ・対人関係—— (pp. 2-21) 金子書房
- 文部科学省 (2019). 平成 30 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について 文部科学省 Retrieved from https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiedfile/2019/10/25/1412082-30.pdf (2020 年 5 月 21 日)
- 中尾 達馬 (2012). 愛着スタイル尺度における自己評定と他者評定の不一致が適応へ及ぼす影響 琉球大学教育学部紀要, 80, 225-234.
- Ronningstam, E. F. (2005). *Identify and understanding the narcissistic personality*. New York: Oxford University Press.
- 清水 健司・岡村 寿代 (2010). 対人恐怖心性-自己愛傾向 2 次元モデルにおける認知特性の検討——対人恐怖と社会恐怖の異同を通して—— 教育心理学研究, 58, 23-33.
- 苫米地 憲昭 (2006). 大学生——学生相談から見た最近の事情—— 臨床心理学, 6, 168-172.
- Wink, P. (1992). Three types of narcissism in women from college to mid-life. *Journal of Personality*, 60, 7-30.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 神谷真由美
2. 発表標題 青年期の過敏型自己愛傾向の発達の变化
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 神谷真由美
2. 発表標題 青年期の愛着スタイルと愛着対象の発達の变化 中学生・高校生・大学生の比較検討
3. 学会等名 日本発達心理学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 神谷真由美
2. 発表標題 青年期の過敏型自己愛傾向の変容と愛着スタイルの関連 中学生・高校生・大学生を対象とした縦断調査
3. 学会等名 日本学校メンタルヘルス学会第23回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----